

公益財団法人 日本習字教育財団

學術研究助成成果論文集

Vol.3

ごあいさつ

このたび『公益財団法人 日本習字教育財団 学術研究助成成果論文集 Vol.3』刊行の運びとなりました。本学術研究助成制度もおかげさまで、平成三十年度には第五回の区切りを迎えることとなります。この間、教育を取り巻く状況は大きく変化しました。と同時に、社会から求められる学術助成事業のあり方も大きく変容した感があります。公益財団法人として、このような社会のニーズの変化に柔軟に対応しつつも、書学書道の振興発展に資する学究の助成を念頭に置き、今後も着実に歩を進めて参りたいと思えます。

なお、本書の刊行にあたっては、審査委員・査読委員の先生方をはじめ、関係者の皆さまには多くのご指導ご協力を賜りました。ここに心からお礼申し上げます。

二〇一七年 三月三十一日

公益財団法人 日本習字教育財団 理事長 甲地史昌

助成研究企画 審査所感

研究助成審査委員長 古谷 稔

わが国の習字・書写書道教育及びその研究と当該分野の振興発展に寄与することを目的として、学術研究助成も第三回を迎え、このたびも各領域担当の先生方によって厳正な審査が行われ、かつ査読委員の査読により、成果論文集上梓の運びとなりました。

これまでの学術助成成果論文と比べて内容的にも傾向が変わりつつあり、本来の学術助成の目的に対比させてみると、見直すべき点が出ているようにも思われます。

たとえば、いま国内で重視されている小学低学年までの書写教育や、生涯学習教育に関わる研究にも目を向けていただきたい。とくに小学低学年は、それ以後の小学校高学年、中学校、さらに高等学校へ向けて必要不可欠な教育分野と考えます。

もちろん、習字・書写書道教育とともに、その底流にある書道史あるいは文字学ほか、研究分野の振興発展のためにも、大いに活性化が期待されます。

しかしながら、教育課程においてもっとも大切な時期に、何をどのように指導し、限られた時間に生徒がいかなる体験ができるかは、人間形成の上からも重要といえます。本研究助成により、所期の目的にかなった意欲的な研究企画が生まれることを願っています。

査読審査を終えて

査読委員長 大橋修一

『公益財団法人 日本習字教育財団 学術研究助成成果論文集』も第三回の刊行となり、今回も多彩な五編の成果が載録された。

各成果についての所感は、以下の通りとなる。

①の栗躍崇「燕国璽印の判別基準」は、多くの先行研究を踏まえつつ、多方面から考察した意欲的な論考である。大学院に在籍中であるが、今後の活躍を期待させる充実した研究であり、指導者の十分な助言も感じられる内容であった。②は、内田誠一を研究代表者とするグループの研究成果「近代日本における短冊の蒐集とその周辺——短冊蒐集をめぐる文事と交流を中心に——」である。二年に跨る研究の中間成果である。この分野は先行研究も少ない。文献・実作を丁寧に調査し、実証的な論考である。今後の研究成果にも期待できよう。③の根來孝明「三井親和の書について——十八世紀における唐様書道の展開に関する考察——」は、荒削りな感がなくもない。がしかし、問題意識に富んだ興味深い論考といえよう。今後は「和様化した唐様」についての研究をさらに深化させて欲しい。④の植野健造「青木繁《かるた》《漢詩かるた》について」は、新出資料の調査報告である。今後は本研究を踏まえ、青木繁の芸術に書がどのような影響を与えたのか、踏み込んだ研究を期待しよう。⑤は、中村寿樹「情操教育に主眼をおいた書教育の実践について——その実践報告を中心に——」である。現職教員ならではの実践報告となっている。提示された実践法などは、教育現場で参考にすることは可能であろう。が、文章化するにあたり、先行研究の調査においては、主観的になりすぎないように思われる。

助成対象者には、更に研究の歩みを進めていただきたい。

目次

ごあいさつ	公益財団法人 日本習字教育財団 理事長 甲地史昌
助成研究企画 審査所感	研究助成審査委員長 古谷 稔
査読審査を終えて	査読委員長 大橋 修一

〈論考〉

燕国璽印の判別規準

栗 躍 崇

7

近代日本における短冊の蒐集とその周辺——短冊蒐集をめぐる文事と交流を中心に——

内田 誠一・増田知之・吉良史明

94

三井親和の書について——一八世紀における唐様書道の展開に関する考察——

根來孝明

138

〈新出資料調査報告〉

青木繁《かるた》《漢詩かるた》について

植野健造

177

〈実践報告〉

情操教育に主眼をおいた書教育の実践について——その実践報告を中心に——

中村 寿樹

220

英文タイトル

研究助成審査員一覧